

雑誌の所在の調べ方

求める記事の載っている雑誌名、巻号がわかっている場合には、各種の雑誌目録（冊子体目録）で所在を調べることができます。

和雑誌

教養部和雑誌目録にあるか？ _____YES _____終了

NO

学術雑誌総合目録（和文編1985年京大個別版）

バックナンバーセンター所蔵目録（和文編）

京都大学和文雑誌総合目録（1974年版）にあるか？ _____YES _____終了

NO

学術雑誌総合目録（和文編）にあるか？（全国の所蔵） _____YES _____終了

NO

国会図書館所蔵和雑誌目録にあるか？ _____YES _____終了

NO

（カウンターへお尋ねください）

洋雑誌

京都大学雑誌目録（欧文自然科学編、人文・社会科学編）

教養部図書館所蔵洋雑誌目録（1987.10 現在）

バックナンバーセンター所蔵目録（欧文編）にあるか？ _____YES _____終了

NO

学術雑誌総合目録（欧文編1979年版）（補遺版1982）

にあるか？（全国の所蔵） _____YES _____終了

NO

国立国会図書館所蔵欧文雑誌目録にあるか？ _____YES _____終了

NO

（カウンターへお尋ねください）

教養部所蔵目録

1. 『教養部所蔵和雑誌目録』

教養部に所蔵している雑誌の最新データです。 教養部の各教室の備付け雑誌についてもその所蔵先がわかります。

京都大学所蔵目録

2. 『学術雑誌総合目録 和文編1985年版 京都大学個別版』*

1983年5月1日現在、京都大学に所蔵している雑誌のデータ。 京都大学のどの図書館(室)に所蔵しているかわかります。

3. 『京都大学欧文雑誌総合目録 人文・社会科学編(1973年版)、自然科学編(1979年版)』*

京都大学に所蔵する欧文雑誌の目録で、人文・社会科学編は昭和48年4月1日現在、自然科学編は昭和53年4月15日現在のデータ。 後者は誌名中のキーワード語から、その正式誌名と誌名番号を検索することができるキーワード索引がある。

4. 『京都大学購入外国雑誌目録 1987年度』

各学部、各教室も含め京都大学が1987年度に購入する外国雑誌リスト。 購入分のみで受贈雑誌は含みませんが、所蔵教室・講座まで確認できます。

5. 『バックナンバーセンター所蔵目録 和文編、欧文編 (暫定版)』

1984年、18部局から附属図書館へ移管された雑誌からなるバックナンバーセンターの所蔵目録。 『2、3』の目録の所蔵データは、その後移管されている場合がありますので、この目録により確認する必要があります。

6. 『京都大学和文雑誌総合目録 1974年版』*

1974年3月31日現在所蔵している雑誌のデータ。 データは古いですが、中国文、朝鮮文雑誌を含んでいます。

7. その他各学部・各研究所単位の所蔵目録。

他大学・他機関所蔵目録

8. 『学術雑誌総合目録 和文編（1985年版）、自然科学欧文編（1979年版）、人文・社会科学欧文編（1980年版）、欧文編補遺版（1982）』
国・公・私立の大学図書館、各省庁所轄研究機関、民間の研究機関などに所蔵されている雑誌の総合目録。主要な全国書誌として利用されています。

9. 『外国雑誌現行受入目録 1986年版』

外国雑誌センター館（東北大学附属図書館医学分館、東京大学農学部図書館、東京工業大学附属図書館、一橋大学附属図書館、大阪大学附属図書館中之島分館、神戸大学附属図書館、九州大学附属図書館医学分館、鹿児島大学附属図書館）で（昭和61年10月30日現在）昭和61年度に継続受入中の外国雑誌。

10. 『朝鮮文雑誌・新聞総合目録』（アジア経済研究所編）

主要大学研究機関および、アジア関係研究機関に所蔵されている19世紀末の大韓帝国樹立期から1986年末に刊行された朝鮮文で書かれた逐次刊行物の目録。

11. 『京都府立総合資料館所蔵 逐次刊行物目録（昭和56年12月末日現在）』

12. 『国立国会図書館所蔵和雑誌目録 昭和58年末現在』『同追録 昭和59年1月－6月』『国立国会図書館所蔵欧文雑誌目録 1974年末現在』
『国立国会図書館所蔵中国語・朝鮮語雑誌目録 昭和59年末現在』『国立国会図書館所蔵新聞目録』昭和55年12月末日現在』

13. その他：各大学、専門機関の所蔵雑誌目録

筑波大学、大阪大学、東京工業大学、国立民族博物館等

.....
以上の雑誌目録は教養部図書館のカウンターに備付けてあります。雑誌目録の使い方がわからないとき、調べてもなお所在がわからないときなど、遠慮なくカウンターの掛員に尋ねてください。

*印： 教養部教室所蔵分について、その教室名が抜けているものがあります。前記の『教養部所蔵雑誌目録』で、確認してください。
.....

エミール・デュルケム 『自殺論』 (1897)

優れた芸術作品、たとへばバッハやモーツァルトの音楽は、何度聴いても飽きないし、また聴くたびにににかしらの発見がある。社会学の古典にも似たような性格がある。つまり社会学の優れた作品は、それが古い時代の著作であっても再読が可能であり、しかも現代社会を考えるうえで今でも役に立つということである。たぶん社会学の基本的な見方や考え方に（つまりは社会学の対象となる社会や人間のある側面に）それほど大きな変化がないためなのかもしれない。

エミール・デュルケム(1858-1917)の『自殺論』はまさにそうした一冊であり、テーマ自体のおもしろさと、分析方法の一貫性と言うおもしろさとが結びついた社会学の古典の中でも抜きん出た傑作である。

この本のなかで、デュルケムは、それまで専ら個人的要因によって説明されてきた自殺という現象を、社会的環境の変化と言う社会的要因で説明しようとした。彼は、様々な統計的データを用いて、社会の統合や連帯が弱まって個人が集団から切り離されてしまう場合、また反対に集団の統合が強すぎて個人がほとんど完全に集団にのみこまれてしまう場合、そして社会の規範が緩んだり崩壊したりして個人の欲求をコントロールすることができなくなり個人が際限のない欲求にかりたてられる場合、それぞれの場合に自殺率が高くなることを立証しようとしたのであった。（これが有名な自殺の三類型－「自己本位的自殺」「集団本位的自殺」「アノミー的自殺」－である。）

自殺を社会現象ととらえることは今日ではいわば当たり前のこととなっているが、自殺を精神異常、人種、遺伝、季節、気候といった要因と結びつけて説明していた当時あっては、デュルケムの説は、常識にたいする社会学からの挑戦であったといえる。社会的要因を強調しすぎる点や、データの使い方などについて問題はあっても、社会学的方法の独自性とその有効性を明らかにしようとする熱意と分析の鋭さは、読者に一種の爽快な感動をあたえずにはおかないであろう。

(社会学 高橋 三郎)

エミール・デュルケム著 宮島 喬訳 『自殺論』 (世界の名著 47)

所蔵〔図書館 010/133〕〔英語学教室〕〔心理学教室〕

エミール・デュルケム著 宮島 喬訳 『自殺論』 (中公文庫)

「図書館だより」についての御意見を参考調査掛へお寄せください。(Tel.6524)